

親基

右

有房

伊經

別覺

周悞

侍從後

良賢

判者

亮公

顯昭

子三

六條殿

為廣

中納言殿

辨後

美法

良賢

判者

亮公

一番 閑庭秋来

左

頼輔

廿秋乃奈よあまの初風言い也人の海より海への里

右

有房

人よ人の海より初風言い也人の海より海への里

左右ともいふさういふ侍に左乃右の庭より入事

やあふはのあう侍に右いんよあふいふ侍より

の河をむよあふいふ庭のふりふりあふり右海に

り侍る人さうや又云左右ともいふ侍より

あふりたれてああう一右左のまゝいふあふり

巻百人

四十一

はらへんむと侍をあらしてさるむくふ勝者やのさ
や

二番

左

雅光

あまのつとめおんしちる宿の相承をさるし林にさる

右

六條殿

あまのつとめおんしちる宿の相承をさるし林にさる

たきは相承をさるし一節とさるさるのさる

ららしと侍りさるさるさるさるさるさるさる

しと侍るさるさる曾丹の我さるさるさるさるさる

あまのつとめおんしちる宿の相承をさるし林にさる
すくはぬさるさるさるさるさるさるさるさる
侍りさるさるさるさるさるさるさるさるさる

三番

左

定宗

人あはれさるさる宿の相承をさるし林にさる

右

伊經

あまのつとめおんしちる宿の相承をさるし林にさる

右を林をさるさるさるさるさるさるさるさる

左勝へし又たの秋浦さるさるさるさるさるさる

香林齋

香林齋

心もくくはつと枝くくれももく青そ秋はらふよ
はめてはくくももくくはつと枝くくれももく青そ
くくはつと枝くくれももくくはつと枝くくれももく
くくはつと枝くくれももくくはつと枝くくれももく
くくはつと枝くくれももくくはつと枝くくれももく

日番

左
お

道徳

まろすくふ蒼く岩をわくくもて枝くくはつと枝くくれももく

右

為廣

蒼くはつと枝くくれももくくはつと枝くくれももく

心詞勢のくはつと枝くくれももくくはつと枝くくれももく
まろすくふ蒼く岩をわくくもて枝くくはつと枝くくれももく
すくくはつと枝くくれももくくはつと枝くくれももく
まろすくふ蒼く岩をわくくもて枝くくはつと枝くくれももく
すくくはつと枝くくれももくくはつと枝くくれももく

日番

左
お

宗因

まろすくふ蒼く岩をわくくもて枝くくはつと枝くくれももく

右

別見

まろすくふ蒼く岩をわくくもて枝くくはつと枝くくれももく

香林齋

香林齋

卷八十八

五十三

とあつてあつて待つあや物も中待つあや物の
心よにらうり物も待つあや物事にして待つあ

九番

左抄

仲遠

日を入は道志けさる庭の面より待つあや物の心風

八右

侍泛殿

いふ秋のまゝあや物も中待つあや物の心風

右あや物乃待つ心を具あや物も中待つあや物

いふて人あや物乃待つ心を具あや物も中待つあや物

是待つ心も左右あや物も中待つあや物

云左あや物も中待つ心を具あや物も中待つあや物

も秋の物も中待つ心を具あや物も中待つあや物

十番

左抄

仲頼

いふて庭の後物も中待つ心を具あや物も中待つあや物

右

美濃殿

日成待つあや物も中待つ心を具あや物も中待つあや物

いふて待つあや物も中待つ心を具あや物も中待つあや物

すれ事乃待つあや物も中待つ心を具あや物も中待つあや物

いふて待つあや物も中待つ心を具あや物も中待つあや物

卷八十八

五十四

和歌集

十一番

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

十一番

秋風

ひらきゆりゆく秋風はあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

良賢

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

あまのこゝろはあはれ物く見ゆる神もゆゑん事い

一 長精進戀

左将

頼輔

和歌集

十一番

つく百日のめ乃志を引の縁意落しつゝふたり志ある
 左秋の秋乃あは恨は秋の中ふれひのけぬ
 心地しゆる右れいくまのんうらひいあつてしをる
 もいふもやまゆいしと又持を又またらるゝとあふ
 縁もゆるゆと又いふ事ゆゆるはた詞といひま
 きてゆゆるいふゆると女影のゆまあまききん
 の月と意をさるめてしとゆるゆるはゆるあつて
 悉せしつゝふみまきのまのききんといゆるん
 うとと好まてそれあま余の縁ふゆるいふと縁
 しし右の晴りてゆるん

三番

左

三宗

月日をおこしてすくはる海の家ふ事とわまあふ

右

伊羅

巾のちはんの佛ふとあまをいふおまはねとあま
 右のみまのいよまをいふらん縁あふあまといし
 やまといふあまはあまらあんしゆるあまといし
 たしあれと奇念にいは事とゆるん又とけ左
 たらつもの長精をのふとあまといふといゆるあま

はま

ゆゑは侍らば右様と申すは其の教も乃中ノ題の心
一かあるいふくよく侍連勝侍あり

九番

左様

仲遠

ふ早振の社ふくむ秋神く其の心ぬと妹く新が
右

侍従

ひろ侍に老翁と申すは其の心ぬと妹く新が
右より侍ていふくよく侍連勝侍あり
一の心ぬと申すは其の心ぬと妹く新が
八の心ぬと申すは其の心ぬと妹く新が

十番

左様

仲頼

其志の目教の心ぬと申すは其の心ぬと妹く新が
右

英濃殿

百秋よりくわき乃内は老翁と申すは其の心ぬと妹く新が
右より侍ていふくよく侍連勝侍あり
はうん侍にふくよく侍連勝侍あり
この心ぬと申すは其の心ぬと妹く新が

春
三十一

三十一

於大我うらさゆを侍りしや少於左の勝るや

十一番

左持

親基

心も留も若くしてさうすもふさる夜もあつてやや

右

良賢

とせ海くせひをらけいさるさ孫ぬはふふ袖をさる

はなとすふみさう地ありき事侍りてはひさう

十捕まふさしめふ見とさ侍りぬうく□てはは

ひおのをのくもさるさ孫ぬはふふ袖をさる

さうすいゆりてはははははははははははははははは

右大臣家哥合

治承三年十月十八日

題

霞 苑 郭 月 紅葉

雪 祝 忘 旅 述 懐

歌人

左方

如房 兼實

皇太后宮大夫入道

季経 胡長

隆信 胡長

行頼 胡長

師克

良清

俊忠

藤原氏

三十一